

上方発 企業の社会貢献宣言

—志高き企業経営を目指して—

社団法人関西経済同友会
CSR・企業倫理委員会

2007.5.14

目次

I.	現状認識	・・・p.1
II.	上方発 企業の社会貢献の考え方	・・・p.2
III.	上方の家訓・倫理観	・・・p.4
IV.	関西財界の先駆者たち	・・・p.8
V.	「上方発 企業の社会貢献宣言」 －志高き企業経営を目指して－	・・・p.10
VI.	先人の倫理観と「上方発 企業の社会貢献宣言」との関連	・・・p.12
VII.	参考資料① －現在の関西企業の取り組み－	・・・p.14
	参考資料② －注釈－	・・・p.20
	参考資料③ －参考図書・HP－	・・・p.23
VIII.	活動状況	・・・p.24
IX.	名簿	・・・p.25

I. 現状認識

1. 基本認識

昨今、「企業の社会的責任」が各メディアで毎日のように取り上げられている。この「企業の社会的責任」という言葉はもちろん以前から存在していた。江戸時期から明治・大正・昭和の多くの日本の企業家の中には「企業が社会のためにあること」を自明のことと考えていた人達も少なくない。

しかし、ここ数年、大きく取り上げられるようになったのは、海外のみならず日本においても頻発する企業不祥事、経済のグローバル化による影響度の増大、消費者団体・NPO・NGOの台頭に代表される企業活動に対する厳しいチェック、ITの発達により不祥事が世界に瞬時に伝達されることなどが、その背景としてあげられる。

特に日本では、バブル崩壊後、企業は徹底的な事業の効率化により業績を回復させたが、その過程において一部企業において過度の株主重視や短期的利益追求の風潮が広がったり、マネーゲーム的なM&A等が散見されるようになった。

その反省として、コンプライアンスやCSR(企業の社会的責任)の考え方が広がってきたが、その内容は米国の理論の受け売りに止まっているように感じる。実践面は、CSR部の設置、倫理憲章への従業員のサイン、CSR報告書の作成も体裁を整えることで終わっていたり、CSRの広報が一部で企業のイメージアップを目的と捉えられているのも事実である。現場からは、そうした活動に対して、やっかいなものが始まったとさえ受け止められている場合もある。社会の健全な発展のためには、モラルや倫理観の欠如は日本の世論・人々の価値観にとって許さざることではなく、その存在意義に対する疑義さえ生じている。

2. 根本課題

CSR・企業倫理は何もバブル崩壊や景気とは本来関係ないものである。今一度、企業は原点に立ち返り、社会における存在意義を再確認しなければならない。そのために、CSR経営の推進、企業倫理の意義、コンプライアンスの徹底、コーポレート・ガバナンスの意味について再考し、実行すべき課題を明確にすべきである。そして、経営者トップ自らが経営理念に基づいた「志」高き経営を目指していかなくてはならない。

Ⅱ. 上方発 企業の社会貢献※の考え方

2000 年以降、経済同友会が企業白書「『市場の進化』と社会的責任経営」を公表し、日本経済団体連合会（経団連）もCSRの視点を踏まえ企業行動憲章と実行の手引きを改定するなど、経済団体が主導となりCSRへの本格議論が高まってきた。そして、2003 年は「CSR元年」と呼ばれ、多くの企業がCSRへの取り組みを始めた。メディアもこぞって「CSRランキング」を公表する。更に 2007～2008 年を目標にCSRの規格化をISOが決定した。多くの企業はCSRという波に乗り遅れないように努めている。

CSR、コーポレート・ガバナンス、ステークホルダー、サステナビリティなど全て外来語である。欧米のCSRがグローバル・スタンダードであると言われると、日本人はそのまま直輸入し、上手に真似をしてしまう。しかし、CSRの発祥の仕方も、元々日本人が持っている倫理観・価値観など欧米のそれとは必ずしも全て一致するわけではない。今、CSRという外来語をレンタルして自分たちにぴったり合っているかのように振舞っているが、実は、経営者も、その従業員にも、本当の意味で自分たちのものになっていないのではないだろうか。

「原点に立ちもどる」ために、我々、関西経済同友会はその立地基盤である大阪、更には大阪に大きな影響を与えた京都、近江など江戸時代の上方の商人たちの考え方や倫理観、またそれらを受け継ぐ、関西実業界先達の実践に立ちもどることが必要である。

第一に、企業の本業・業務が社会の発展に役立っており、企業内部だけではなく社会と向き合っていないなければならない。

第二に、従業員のモラル・企業の雇用責任も重大である。自社だけ良かったら良いという企業の論理はもはや通用しない。

企業の社会的責任を全うするためには、「企業の社会的貢献」という考え方の本質的な理解とその実践が今こそ必要であり、日本的CSRの源流である関西の商人道、商業道徳を再確認し、この関西先人の教えをもとに「上方発の企業の社会貢献宣言」を作成し、企業経営の指針として発表する。

※ここでいう「社会貢献」とは、慈善事業やメセナ活動といった、余裕のある企業が行う奉仕活動といった狭義の概念ではなく、企業が社会的存在であるという大きな概念より生じる、本業を通じた社会への貢献、利害関係者・環境への配慮なども含む広範囲の概念である。

【何故、上方商人の倫理観に学ぶのか？】

商売をしていく上での商売理念、商人道、古くは家訓と呼ばれるものは、どうして出来上がってきたのか。それは商人台頭の時代に遡る。織田信長・豊臣秀吉の頃から、全国的な流通を背景にした商人が登場してくる。更に徳川の時代になって、商人が一段と活躍するようになる。当時商人が最も活躍していたのは、「天下の台所」と呼ばれる大経済都市「大坂」であった。18世紀中頃、江戸は半数を武家人口が、京都は天皇と公家が多いのに対して、大坂は人口が41万人余りで、そのうち武士階級が8,000人程度であった。人口の98%が町人であり、大坂はまさに商人の町であった。その商人は、「士農工商」という身分固定制度により、最も低い身分に固定化されていた。商人は、当時の社会的地位では下位に置かれながらも多大な経済力をつけ、その蓄積を支配階級の武士階級に御用金などとして吸い上げられていた。そうした中で商人は、自らの存在価値を確認し、商業活動の正当性を確立する必要があった。また、元禄バブルの時代、商人の中には、不当な取引で儲けたり、賄賂を行ったりして、悪徳商人と呼ばれる人も多数存在し、「心ある商人とはいかにかにあるべきか、商売とはいかにかにあるべきか」と問う時代でもあった。そのような時代背景の中、生まれたのが石田梅岩の石門心学である。

更に「家訓」が多く姿を現すのは、享保の改革による質素儉約・商人勢力抑制の時代である。「天下の貨、七分は浪華(なにわ)にあり」と言われた大坂大商人の家の多くも、この改革の結果、倒産・没落が目立つようになる。他の商家の没落をみた商人たちは、せめて自分の家、一族の存続が可能になるためにはと、「商売とはいかにかにあるべきか」を真剣に考え、自らの経験や戒めや教えを、知恵を絞り、「家訓」という形で後世に残そうとした。

また、近江商人に代表されるような家訓は、幕藩時代、彼らが藩を越えて、縁もゆかりもない他国へものを売りに行き、他国で店を開くために、「商売とはいかにかにあるべきか。長期的に売り続けるにはどうするべきか。」と行商先の人々に、信用という目に見えない財産を築こうと努力することから、その思想の端を発している。

大丸の下村彦右衛門の「先義而後利者栄(義を先にして利を後にする者は栄える)」の家訓は、現在の大丸においても事業の根本理念となっているように、厳しい時代背景の中で様々な経験や戒めや教えから生まれてきた先人の倫理観は、「社会との共生」、「勤勉」、「儉約」、「正当な利益」、「正直」など、今日のビジネス倫理において充分通用するものであり、我々が日々直面している厳しい現実に対応し、様々な判断を下す際のヒントになると考える。

(出典)

- ・「大阪まち物語」なにわ物語研究会 編
- ・「大阪ブランド資源報告書」大阪ブランドコミッティ
- ・「商家の家訓 商いの知恵と掟」山本真功
- ・「商いの原点 江戸商家の家訓に学ぶ」荒田弘司
- ・「江戸に学ぶ企業倫理 日本におけるCSRの源流」弦間 明＋小林俊治
- ・「企業倫理とは何か 石田梅岩に学ぶCSRの精神」平田雅彦

Ⅲ. 上方の家訓・倫理観 (1/4)

石田梅岩(※1:p.21): 「石門心学」(著書「都鄙(とひ)問答」 1738 年)

- 『**我が身を養わるる売り先を粗末にせず**』
・自分の商売を育てていただくお客様を粗末にしない。→**顧客満足**
- 『**御法を守り、我が身を敬むべし**』
・世の中で決められた御法度を守り自分の身を慎むことが大事。→**コンプライアンス**
- 『**商人というとも聖人の道を知らずんば、同じ金銀を儲け、子孫の絶ゆる理に至るべし。**』
・商人といえども商人道を心得、道徳心をしっかり持っていなければ、同じ金銀を儲けながら世間に許されぬ金儲けをすることになる。いつかは破綻をきたし、子孫も絶える。→**コンプライアンス**
- 『**生まれながらの正直にかえし度き為なり**』
・生来人間が持っている正直の心に返したい。→**正直・誠実な経営**
- 『**たとひ主人たりとも非を理に曲ぐる事あらば少しも用捨致さず**』
・たとえ主人であっても、間違ったことを正しいとして、押し通すようなことがあれば、少しも遠慮せず、さっそく改めさせるようにする。→**コーポレート・ガバナンス**
- 『**世界の為に三つ入る物を二つにてすむようにするを儉約と云う**』
・世の中のために三つ要るものを工夫して二つで済ますようにすることが本当の儉約。→**サステナビリティ**
- 『**誠の商人は先も立ち、我も立つことを思うなり**』
・まことの商人は商売の相手を立てながら、自分も立つという心がけを持っているものだ。→**社会との連携**
- 『**物を施すは禮を受くる為にはあらず**』
・人が困窮している時に施しを行い、救われた人からしみじみとお礼を言われなくもそれが苦にならない。その心境は聖人に勝るとも劣らない。その志が貴重である。→**ボランティア精神**

(出典)

・「企業倫理とは何か 石田梅岩に学ぶCSRの精神」 平田雅彦

Ⅲ. 上方の家訓・倫理観 (2/4)

<上方商家の訓え [17世紀～19世紀]>

住友家:住友政友 (※2:p.20)

○『**商事候や不及言候へ共、万事情に可被入候**』

(あきないごとそうろうやいうにおよばずそうらへとも ばんじょうにいらるべくそうろう)
・商い事をする際は言うまでもないことだが、万事情について利益よりも心を重視するように。→**コンプライアンス**

大丸:下村彦右衛門 (※3:p.20)

○『**先義而後利者栄 (義を先にして利を後にする者は栄える)**』

・お客様や社会への正義を優先し、利益を後回しにする者は栄える。→**顧客満足**

○『**富好行其徳(富めば好んでその徳を行なう)**』

・商品値札の裏に「富好行其徳」の5文字を刷り込む。徳を行なうのは富者としての義務。→**慈善事業**

高島屋:飯田新七の綱領 (※4:p.20)

○『**商品の良否は明らかに是を顧客に告げ、一点の虚偽あるべからず**』

→**正直・誠実な経営**

高島屋:二代目飯田新七の言語録

○『**堅牢確実なるものを売らんと決心し～薄利に甘んじ、客を利し、併せて我も利し**』

・丈夫で品質のちゃんとしたものを売ろうという決意をし～薄利で満足し、客に得をさせ、ついでに自分も利益を得る。→**本業を通じた社会貢献**

住友家:広瀬宰平 (※5:p.20)

○『**浮利にはしり軽進すべからず**』

・目先の利益を追って、軽々しい儲け主義に走ってはならない。→**本業を通じた社会貢献**

○『**名誉を害し、信用を傷つくるの挙動あるべからず**』

・名誉を害し、信用を傷つける行動をとってはならない。→**正直・誠実な経営**

○『**廉恥を重んじ、貧汚の所為あるべからず**』

・恥になるようなことはするな。心貧しい行為をしてはならない。→**正直・誠実な経営**

○『**逆命利君、謂之忠(命に逆らっても君を利す、之を忠と謂う)**』

・本当の忠義とは、上司や主君の命令、たとえ国家の命令であっても、それが主家のため、国家のためにならなければ敢えて逆らうことあるべし。

→**コーポレート・ガバナンス**

(出典)

・「商家の家訓 商いの知恵と掟」 山本眞功

・「江戸商家の家訓に学ぶ 商いの原点」 荒田弘司

・「江戸に学ぶ企業倫理 日本におけるCSRの源流」 弦間 明+小林俊治

・住友グループ広報委員会HP <<http://www.sumitomo.gr.jp/committee/index.html>>

Ⅲ. 上方の家訓・倫理観 (3/4)

<近江商人(その1) [18世紀中頃～19世紀中頃]>

(近江商人の生活信条)

○『始末してきばる』

・出来るだけ無駄を省き儉約に励み、支出を抑えて経済性を高め、一方で勤勉に働き、才能を最大活用し、創意工夫することで収入の増加を図る。

→サステナビリティと勤勉

西川甚五郎 (※6:p.21)

○『御公儀様御法度之趣急度相慎相守可申事 並 掟堅相守可申事』

(ごこうぎさまごはつとのむき、きつとあいつつしみ、あいまもりもうすべきことならびにおきてかたくあいまもりもうすべきこと)

・幕府や藩の令で禁じられているようなことは行いを慎み、法を遵守すること、仮に禁を侵そうとする者が出たときには、必ず食い止めなければならない。

→コンプライアンス

○『舟間之節ニテモ余分口銭申請間敷候、惣テ世間害成事致間敷候事』

(しゅうかんのせつにてもよぶんのこうせんもうしうけまじくそうろう そうじてせけんにかいなることいたすまじくそうろう)

・品物が不足がちになる時期であっても高い値段で売ろうとしてはいけない。何事においても世の中の人々に害をもたらすようなことはしてはならない。

→社会との連携

中村治兵衛 (※7:p.21)

○『自分の事には思はず、皆人よきようにと思ひ、高利望み申さず～ただそのゆくさきの人を大切におもふべく候』

・商いは自分の利益のためではなく、全ての人に満足してもらうことだと考え、高い利益を望んではいけない。～他藩へ商いに出かける場合は、行商先の他藩の皆さんを大切に思って商売しなさい。

→三方よし「売り手よし・買い手よし・世間よし」の原典

矢尾喜兵衛 (※8:p.21)

○『商家の主人たる者、他人の子を多く抱え使うこと、全く商売の道の指南をいたし、銘銘を男一人に仕上げわたす師匠と心得べき事』⇒人財

・他人の子を多く使って雇うことは、その子たちに商売の道を教え、一人ひとりを一人前の男に仕上げ社会に出す師匠になることだと、心得ておきなさい。

→人材教育

(出典)

・「商家の家訓 商いの知恵と掟」山本真功

・「商いの原点 江戸商家の家訓に学ぶ」荒田弘司

・「江戸に学ぶ企業倫理 日本におけるCSRの源流」弦間 明+小林俊治

Ⅲ. 上方の家訓・倫理観 (4/4)

<近江商人(その2) [18世紀中頃～19世紀中頃]>

中井源左衛門良祐 (※9:p.21)

○『始末と吝(しわ)きの違あり。吝(しわ)光りは消えうせぬ。始末の光明満ちぬれば、十万億土照らすべし』

・始末とケチは違う。ケチで貯まった財産はすぐ消える。始末で財産が蓄えられれば、世界中を照らす勢いになるだろう。→サステナビリティ

○『二代三代もつづいて善人の生まれ出る也。それを祈る候には、陰徳善事をなさん』

・2代も3代も続けて立派な人物を輩出するためには、人に知れぬ善事をしていくより他に方法はない。→陰徳

小林吟右衛門 (※10:p.21)

○『主人之職分に相直り親同様萬端(ばんたん)差図(さしず)をも可被到事(いたされるべきこと)』⇒人財

・主人となって一族の子弟を預かる役目についたなら、その子の親になったつもりで万般にわたって指導しなさい。→人材育成

○『御先祖よりの御掟を破り不埒不法之沙汰これあらば、主人たりともその所持品並手廻りにいたるまで取上げの上 諸親類後見の者立会の上隠居申しつくべきこと』

・御先祖から伝わった家訓を破って、道理に外れた行為や不法行為を犯した者は、たとえ主人であっても所有財産・身の回り品に至るまで取り上げた上で、親族・後見人立会いのもと、隠居を申し付ける事。→コーポレート・ガバナンス

外村与左衛門 (※11:p.21)

○『売りて悔やむ事、商人の極意と申す事よくよく納得いたし』

・売った後に、安売りしすぎたかと悔やむほどならば、かえって先々で利益を手にする→顧客満足

初代伊藤忠兵衛 (※12:p.22)

○『商売道の尊さは、売り買い何れも益し、世の不足をうずめ、御仏の心にかなうもの』

・商売道の尊さは、売り手・買い手どちらにも利益をもたらす、社会で不足しているものを補うからであり、仏の教えにかなっている。→三方よし

(出典)

・「商家の家訓 商いの知恵と掟」 山本真功

・「商いの原点 江戸商家の家訓に学ぶ」 荒田弘司

・「江戸に学ぶ企業倫理 日本におけるCSRの源流」 弦間 明+小林俊治

・伊藤忠商事(株)HP <<http://www.itochu.co.jp/main/top.html>>

IV. 関西財界の先駆者たち (1/2)

久保田権四郎 (※13:p.22)

- 『自分の魂を打ち込んだ品物を作り出す事、又其の品物には正しき意味に於ける商品価値を具現せしむる事』
 - ・国の発展に役立つ良い商品は全智全霊を込めて造り出さねば生まれない。ただし技術的に優れているだけでなく、その商品が社会の皆様に役立つものでなければならぬ。→**本業を通じた社会貢献**

小林一三 (※14:p.22)

- 『商売繁盛の秘訣は信用にあり、信用を得る道は誠実にお客本位に行なう事である』→顧客満足
- 『会社の仕事の上のみでなく、一步社外に出るも、絶えず無駄を省くという精神を忘却しないよう慎む事』→サステナビリティ
- 『事業の成否は「人」にあり～事業の経営には、善良にして有為なる『人』を養成するより外に道はない』⇒人財→人材育成

鳥井信治郎 (※15:p.22)

- 『利益三分主義』
 - ・利益は事業の拡大と、お客様と社会へ還元すべきである。→**社会との連携**
- 『陰徳つめば陽報あり』
 - ・陰徳はまことに尊いことであり、陰徳の数々がいつか花を咲き実を結ぶ。→**陰徳**

(出典)

- ・(株)クボタHP <<http://www.kubota.co.jp/>>
- ・「私の行き方」 小林一三
- ・サントリー(株)HP <<http://www.suntory.co.jp/>>

IV. 関西財界の先駆者たち (2/2)

松下幸之助 (※16:p.22)

○『ガラス張り経営』

・秘密を持たず、内外ともにありのまま姿を知ってもらう。→コンプライアンス

○『お得意先と対立しつつ調和する』

→顧客満足

○『商品はわが娘、お得意先はかわいい娘の嫁ぎ先』

・毎日扱っている商品は、長い間手塩にかけたわが娘のようなものであり、得意先はかわいい娘の嫁ぎ先である。娘が嫁ぎ先に気に入ってもらえるか、気になるように、商品についても得意先に気に入られているかという気持ちが大事。

→本業を通じた社会貢献

○『企業の赤字は罪悪である』

・企業の利益とは本来、その活動を通じて社会へ貢献した結果、報酬として得られるものである。赤字であるということは、企業の本来の使命を果たしていない姿である。

→本業を通じた社会貢献

○『雨が降れば傘をさす経営』

・雨が降れば傘をさすのが当たり前のように、正しい仕入れ値で仕入れ、正しい売値で売り、正しい利益をあげる。当たり前のことを当たり前に行う。私心にとらわれて判断を誤り、傘もささずに歩き出してはいけない。

→正直・誠実な経営

○『企業は社会の公器である』

→社会との連携

○『率先垂範』

・経営者・責任者たるもの、みずから先頭に立って真剣に一身不乱、身をもって社員の人たちに範を示すことが大切である。→コーポレート・ガバナンス

○『松下電器は人をつくっている会社です。あわせて電気器具をつくっています。』(人財)

・事業は人にあり、人をまず養成しなければならない。→人材育成

(出典)

・「松下幸之助の見方・考え方」 PHP研究所

・中尾直史氏 講演資料(元松下電器産業(株)人事部次長/(学)雲雀丘学園中学・高等学校校長)

V. 上方発 企業の社会貢献宣言 (1/2)

—志高き企業経営を目指して—

我々は、近世以来の上方の商いの伝統とは「事業の成功を通じて、商いに携わる者すべての人間的成長と、地域社会の幸福の実現を目指す」ものであることを自負し、また、その伝統が地球上のあらゆる場所で認められることを確信して、経営にあたる。

【奉公】

- 企業は社会的存在であり、社会に貢献することがその本分であることを再確認する。
- 社会貢献活動を通じて、多種多様な人々との交流を促進し、異なる文明、文化、知識との触発により、自らの成長を目指す。
- 企業単体の活動のみならず、経済団体等、横のつながりを活用して社会貢献に努める。

【御法を守り、我が身を敬むべし】

- 法令遵守はもとより道德規範に基づいて経営者自ら先頭に立ち行動すると共に、その内容を全従業員に徹底する。
- 短期の利益追及にとらわれず、創業の精神に立ち返り、経営判断を行う。

【浮利にはしり軽進すべからず】

- 「売ればよい、儲かったらよい」だけではなく、確かな品質、環境にやさしく、社会的弱者も利用できる、消費者に益となる製品やサービスの提供を通じて、社会に貢献することを第一とする。
- 消費者が必要な情報を企業自ら率先して、平易な形で提供する。

V. 上方発 企業の社会貢献宣言 (2/2)

—志高き企業経営を目指して—

【始末してきばる】

○無駄を省くと共に、技術やマネジメントの革新を通じてコストダウンを図り、納得できる価格で提供し、自らも又適正利潤を獲得する。

【三方よし】

○グローバル化した企業活動の影響が広範囲に及ぶことを認識し、広く世界の様々な人々への配慮を欠かさない。

○企業は地域社会に根ざした存在であることを再認識し、地域社会の要請に積極的に関与していく。

○M&Aは短期の利ざやや稼ぎを目的としてはならず、あくまで社会への貢献、またその発展を前提として行う。

【人財】

○従業員は社会からの預かりものであり、安易な人員削減や不安定な労働条件での雇用は行わない。

○従業員が社会への貢献ができるよう教育・育成と、その環境づくりに努める。

【陰徳あれば陽報あり】

○慈善事業やメセナ活動に対しては見返りを期待せず、自らの利益の一時的増減にとらわれず継続する。金銭的支援に留まらず、ノウハウの提供や従業員等の自発的参加を推進する。

VI. 先人の倫理観と上方発企業の社会貢献宣言との関連

連綿と続く 上方の経営思想と実践の歴史

Ⅲ. 上方の家訓・倫理観 16～19世紀

石田梅岩(石門心学)

『我が身を養わるる売り先を粗末にせず』

『御法を守り、我が身を敬むべし』

『商人というとも聖人の道知らずんば、同じ金銀を儲け、子孫の絶ゆる理に至るべし。』

『たとひ主人たりとも非を理に曲ぐる事あらば 少しも用捨致さず』

『世界の為に三つ入る物を二つにてすむようにするを儉約と云う』

『誠の商人は先も立ち、我も立つことを思うなり』

『物を施すは禮を受くる為にはあらず』

住友政友(住友)

『商事候や不及言候へ共、万事情に可被入候』

下村彦右衛門(大丸)

『先義而後利者栄(義を先にして利を後にする者は栄える)』

『富好行其徳(富めば好んでその徳を行なう)』

近江商人の生活信条

『始末してきばる』

矢尾喜兵衛(近江商人)

『商家の主人たる者、他人の子を多く抱え使うこと、

全く商売の道の指南をいたし、銘銘を男一人に仕上げわたす

師匠と心得べき事』⇒人財

外村与左衛門(近江商人)

『売りに悔やむ事、商人の極意と申す事よくよく納得いたし』

中村治兵衛(近江商人)

『自分のことには思はず、皆人よきようにと思ひ、高利望み申さず

～ただそのゆくさきの人を大切におもふべく候』⇒「三方よし」原典

広瀬幸平(住友)

『浮利にはしり軽進すべからず』

『御法を守り
我が身を敬むべし』

=コンプライアンス、
コーポレート・ガバナンス

+

『浮利にはしり
軽進すべからず』

=顧客満足、
本業を通じた社会貢献

+

『始末してきばる』

=サステナビリティ

+

『三方よし』

=社会との連携

+

『人財』

=人材育成

+

『陰徳あれば
陽報あり』

=ボランティア精神、
慈善事業



『奉公』

公のために奉仕する精神

Ⅳ. 関西財界の先駆者たち 20世紀

久保田権四郎

『自分の魂を打ち込んだ品物を作り出す事、又其の品物には正しき意味に於ける商品価値を具現せしむる事』

小林一三

『商売繁盛の秘訣は信用にあり、信用を得る道は誠実にお客本位に行なう事である』

『会社の仕事の上のみでなく、一步社外に出るも、絶えず無駄を省くという精神を忘却しないよう慎む事』

『事業の成否は「人」にあり』

鳥井信治郎

『陰徳あれば陽報あり』

松下幸之助

『ガラス張り経営』

『お得意先と対立しつつ調和する』

『雨が降れば傘をさす経営』

『企業は社会の公器である』

『率先垂範』

『松下電器は人をつくっている会社です。
あわせて電気器具をつくっています。』

《日本人の世界観・人生観》

四季、自然→感謝、思いやりの念

仏教、儒教、禅の影響
→和を以って尊しとする。
→謙遜・謙讓の風土

農耕民族的家族主義

武士道というモラルの高さ

長い歴史に育まれた知恵

I. 現状認識(問題の所在)

企業活動の現状は必ずしも満足すべきものではない

海外のみならず日本においても企業不祥事が頻発している。特に日本では、バブル崩壊後、企業は徹底的な事業の効率化により業績を回復させたが、その過程において一部企業において過度な株主重視や短期的利益追求の風潮が広がったり、マネーゲーム的なM&A等が散見されるようになった。その反省として コンプライアンスやCSR(企業の社会的責任)の考え方が広がってきたが、その内容は米国の理論の受け売りに止まっているように感じる。実践面でも、CSR部の設置、倫理憲章への従業員のサイン、CSR報告書の作成も体裁を整える事で終わっていたり、CSRの広報が一部で企業のイメージアップを目的と捉えられているのも事実である。現場からはそうした活動に対して、やっかいなものが始まったとさえ受け止められている場合もある。

II. 上方発 企業の社会貢献の考え方

日本の歴史、文化、伝統に即した指針作り

I. 現状認識(現代の特性)

現代社会の特性と整合性させる必要性がある

企業規模の拡大や経済のグローバル化による影響度の増大、限りある資源や環境に関しての配慮の必要性、消費団体・NPO・NGOの台頭に代表される企業活動に対する厳しいチェックや不買運動、罰金に代表される社会からの厳しい糾弾、ITの発達により不祥事が瞬時に世界中に伝達される情報社会の出現。個人レベルでは志の喪失や責任意識の希薄化、常識の欠如など従来存在しなかった特徴を現代社会は有し、企業もそうした環境下のもとで活動している。

CSRは経営、経営理念そのもの

『V. 上方発 企業の社会貢献宣言』

《志高き企業経営を目指して》

我々は、近世以来の上方の商いの伝統とは「事業の成功を通じて、商いに携わる者すべての人間的成長と、地域社会の幸福の実現を目指す」ものであることを自負し、また、その伝統が地球上のあらゆる場所で認められることを確信して、経営にあたる。

【奉公】

- 企業は社会的存在であり、社会に貢献することがその本分であることを再確認する。
- 社会貢献活動を通じて、多種多様な人々との交流を促進し、異なる文明、文化、知識との触発により、自らの成長を目指す。
- 企業単体の活動のみならず、経済団体等、横のつながりを活用して社会貢献に努める。

【御法を守り、我が身を敬むべし】

- 法令遵守はもとより道德規範に基づいて経営者自ら先頭に立ち行動すると共に、その内容を全従業員に徹底する。
- 短期の利益追求にとらわれず、創業の精神に立ち返り、経営判断を行う。

【浮利にはしり軽進すべからず】

- 「売ればよい、儲かったらよい」だけではなく、確かな品質、環境にやさしく、社会的弱者も利用できる、消費者に益となる製品やサービスの提供を通じて、社会に貢献することを第一とする。
- 消費者が必要な情報を企業自ら率先して、平易な形で提供する。

【始末してきばる】

- 無駄を省くと共に、技術やマネジメントの革新を通じてコストダウンを図り、納得できる価格で提供し、自らも又適正利潤を獲得する。

【三方よし】

- グローバル化した企業活動の影響が広範囲に及ぶことを認識し、広く世界の様々な人々への配慮を欠かさない。
- 企業は地域社会に根ざした存在であることを再認識し、地域社会の要請に積極的に関与していく。
- M&Aは短期の利ざやや稼ぎを目的としてはならず、あくまで社会への貢献、またその発展を前提として行う。

【人財】

- 従業員は社会からの預かりものであり、安易な人員削減や不安定な労働条件での雇用は行わない。
- 従業員が社会への貢献ができるよう教育・育成とその環境づくりに努める。

【陰徳あれば陽報あり】

- 慈善事業やメセナ活動に対しては見返りを期待せず、自らの利益の一時的増減にとらわれず継続する。金銭的支援にとどまらず、ノウハウの提供や従業員等の自発的参加を推進する。

Ⅶ. 参考① -現在の関西企業の取り組み- (1/6)

社団法人関西経済同友会の取り組み

2006年2月10日、「第44回関西財界セミナー」((社)関西経済同友会他共催)において、以下の項目を含む合意事項が採択された。

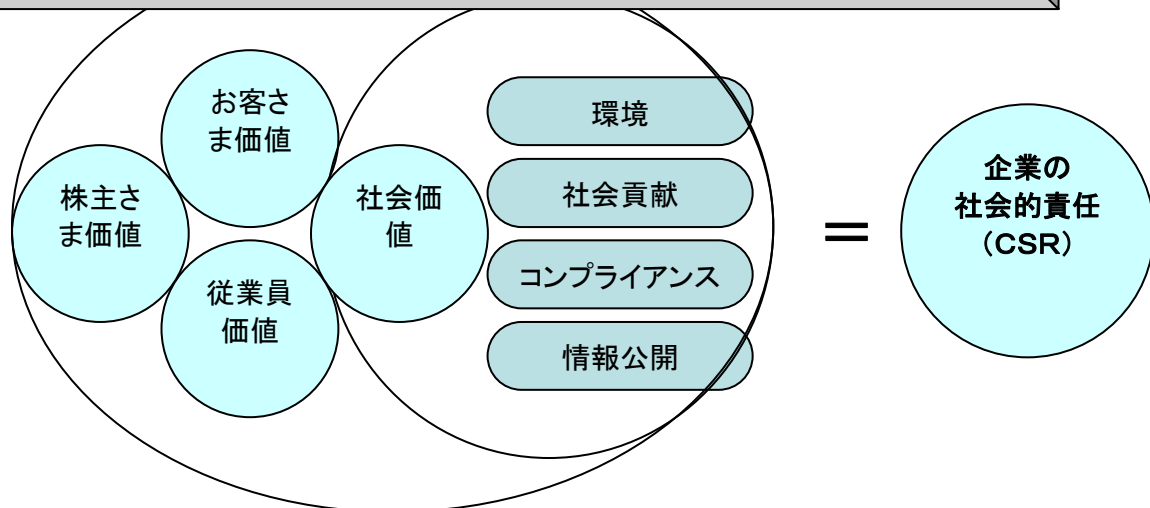
3. 企業活動の原点に立ち返る

- (1)健全な市場競争を基本に、理念なき株主至上主義や利益至上主義に陥ることなく、多様なステークホルダーと関係を重視し、企業の社会的責任を果たす経営を実践する。経営者自ら企業倫理や遵法意識の重要性を強く自覚するとともに、自らの率先した行動により社員一人一人と意識を共有し、社会からの信頼向上に努める。
- (2)人口減少社会に対応し、高齢者や女性など多様な人材が活躍できる環境を整備する。また、日本的経営の強みとされる現場力の向上に努め、現場の持つ技術・ノウハウと安全に対する意識を次世代に確実に継承する。
- (3)産学連携や異業種・異領域との融合がもたらすイノベーションや、事業選択を広げる健全なM&Aなどにより、新たな価値を創造し続ける。また、マーケットニーズを的確に捉え、新たなイノベーションを創出する人材の育成を行う。
- (4)グローバルな事業活動を通じて培った、諸外国・諸国民からの信頼と相互理解という絆を生かし、経済界としても国際社会との融和に向けた主体的な貢献に努める。

Ⅶ. 参考① -現在の関西企業の取り組み- (2/6)

大阪ガス株式会社様の取り組み

グループ経営理念 ～ 価値創造の経営(4つの価値の増大) ～



- 社外監査役の設置、内部監査部門による継続的な監査
→ コーポレート・ガバナンス(御法を守り我が身を敬むべし)
- 企業行動基準の制定、委員会の設置、内部通報制度の設置、無作為抽出による社内アンケートの実施
→ コンプライアンス(御法を守り我が身を敬むべし)
- お客さま対応の専門部署の設置、お客さまへの積極的な情報発信、安全で安定した供給への体制整備、省エネ・効率のよい商品開発
→ お客さま価値の最大化(浮利にはしり軽進すべからず)
- 障害者雇用、高齢者雇用、雇用機会均等、多様な研修制度、自己啓発援助、育児・介護休業制度の充実
→ 働きやすい職場づくり、従業員価値(人財)
- 天然ガスの普及促進活動、省エネ機器・システム開発、グリーン購買・グリーン配送、従業員への環境教育、森林保全活動
→ 環境保護(三方よし)
- ミュージカルへのこども招待、地域の方々とのクリーンアップ活動、高齢者外出介助
→ 地域社会貢献(三方よし)

Ⅶ. 参考① -現在の関西企業の取り組み- (3/6)

がんこフードサービス株式会社様の取り組み

【がんこ宣言】

- 一、我々は、折り目正しい規律と躰でお客様に徹底した満足をしていただくがんこな商いに徹します
- 一、我々は、味一筋に生きる仲間同志で研鑽し合い、商品は宝とするがんこな商いに徹します
- 一、我々は、若い情熱を完全燃焼する場として店を己とするがんこな商いに徹します

がんこは食を提供する会社としての性格もあり、食と地域貢献を主体として、CSRへの取り組みについて次のような具体的活動を行っている。

1. 食の安全の面からも、提供する素材にこだわる。(浮利にはしり軽進すべからず)

野菜は、契約農園を大阪近郊に設け、契約栽培された低農薬ものを使用。豚は、特別な餌で放し飼いにした牧場をオーストラリアに確保。魚は、流通段階での中卸をカットし漁場と直取引を行うほか、商社とともにギリシャに出かけ天然蓄養の品質見極めに取り組みなど、同じ産地直送でもその質の向上を図る。また、産地にこだわることは、安心・安全とともに、間接的にはそれぞれの地場産業の振興にも寄与。海老を調達しているインドネシアでは、マングローブの森再生を支援し、現地の環境保護に貢献。

2. お屋敷を活用した店舗により、文化財の継承に寄与。(三方よし)

緑豊かな大きなお屋敷の維持は、費用等の事情から大変難しくなっている。これらのお屋敷を店舗として利用させていただくことで、歴史・文化・景観の保存に貢献。

- ①「高瀬川二条苑」(京都)は、豪商・角倉了以によって慶長16年につくられ、明治の元勳・山縣有朋、第3代日銀総裁・川田小一郎、元首相安部信行等の別邸として利用されてきたもの。
- ②「平野郷屋敷」(大阪)は、豪商の屋敷として、江戸初期に建てられたもの。
- ③「三田の里」(兵庫)は、文永年間から続く豪族 大原氏の邸宅。
- ④「六三園」(和歌山)は、大正から昭和の初めにかけて北浜で活躍した相場師、松井伊助の屋敷。

3. なにわ花火大会の運営に参加し、地域の振興に貢献。(三方よし)

本社所在地(淀川区)の花火大会の事務局運営などに積極的に参加し、地域の振興に貢献。平成元年より淀川河川敷で開催され、大阪の夏の風物詩の1つとして、天神祭・御堂筋パレードとともに、大阪の3大イベントの1つとして定着し、主要団体の後援も得ている。地元ボランティアスタッフが手づくりで企画・運営・実行、運営委員会は関西財界セミナー賞 2007 の特別賞を受賞。

4. 商店街、業界団体、経済団体への参加(三方よし)

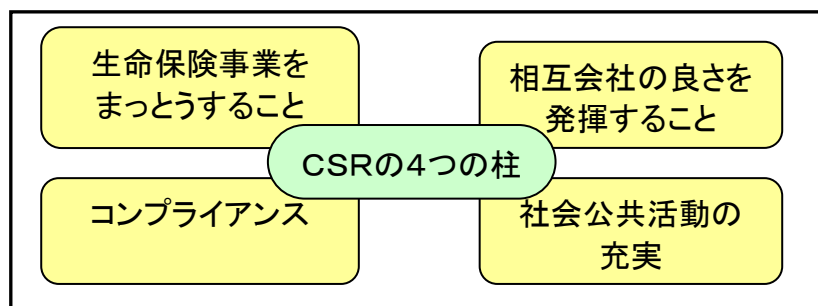
地元商店会をはじめ諸団体の活動に積極的に参加し、業界振興、地域振興に貢献。4年毎に開催され好評を博し、大阪のビッグイベントの1つとなっている食博(次回は2009年)にも参画。

Ⅶ. 参考① -現在の関西企業の取り組み- (4/6)

日本生命保険相互会社様の取り組み

【企業理念】

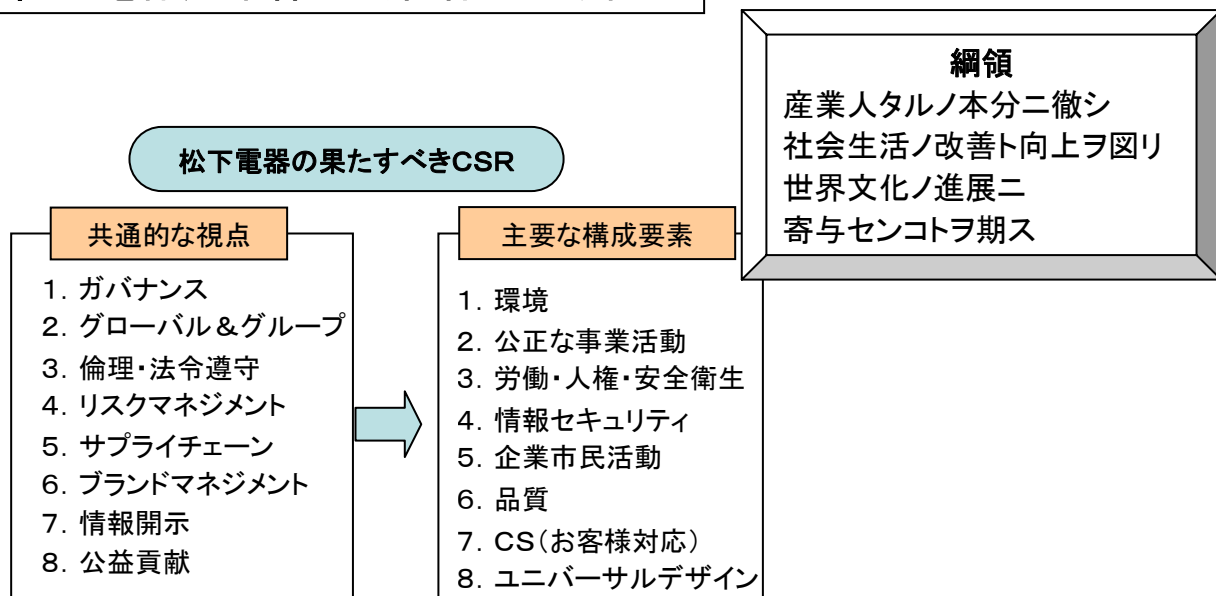
1. 国民各層が真に求める保険を提供し、充実したサービスを行ない、契約者に対する経済的保障責任を誠実に果たすことを第一義とする。
2. 生命保険事業の公共性を自覚し、適正な資産の運用を行なうとともに、広く社会の福利増進に尽力する。
3. 英智にもとづく創造性と確信にみちた実行力とをもって、経営の生産性をたかめ、業績のあらゆる面における発展を期する。
4. 会社の繁栄とともに、全従業員の生活の向上をはかり、また、すぐれた社会人としての資質の育成につとめる。
5. 生命保険業界の一員として、自主性のある協調の立場に立ち、保険思想の普及と、業界全般の進歩発展に貢献する。



- 生命保険事業をまっとうし、ご契約者の皆様にご安心頂くこと
→生命保険事業のまっとう(浮利にはしり軽進すべからず)
- 配当を通じて利益還元を高めること、総代会やニッセイ懇話会でのご意見を経営に生かすこと
→相互会社の良さを発揮(浮利にはしり軽進すべからず)
- あらゆる事業展開の前提であり、基本であるルールや法令をしっかり守ること
→コンプライアンス(御法を守り我が身を敬むべし)
- 環境、文化(青少年)、高齢、健康・医療、地域貢献の各分野での活動を通じ地域・社会との共生を深める→社会公共活動
【具体的な社会公共活動】
 - ・植樹・育樹による緑化活動、環境負荷軽減への取り組み、環境改善に向けた研究への助成→自然との共生・環境保護(三方よし)
 - ・日生劇場の運営、日生名作劇場へのこどもの招待、青少年のためのオペラ教室→青少年の健全育成と文化分野における社会貢献(陰徳あれば陽報あり)
 - ・高齢者の健康及び福祉増進のための老人ホーム運営、介護福祉士などへの奨学金助成→高齢者への社会貢献(陰徳あれば陽報あり)
 - ・日生病院、老人ホームや児童擁護施設などへの無料・低額検診の実施→健康、医療分野における社会貢献(陰徳あれば陽報あり)
 - ・地域清掃活動、卓球部による講習会・模範試合、職員へのボランティアセミナー→地域貢献・ボランティア活動への取り組み(陰徳あれば陽報あり)

Ⅶ. 参考① -現在の関西企業の取り組み- (5/6)

松下電器産業株式会社様の取り組み



- 事業ドメイン別経営体制、CSR 担当室・推進委員会の設置、社外取締役・社外監査役の設置、取締役・役員・社員倫理規定の社内倫理規定の制定
→コーポレート・ガバナンス(御法を守り我が身を敬むべし)
- スーパー正直な経営、公正取引責任者の設置、輸出管理責任者の設置→コンプライアンス(御法を守り我が身を敬むべし)
- 事業ドメイン会社毎の品質本部・CS本部の設置、お客様要望から商品改善への落とし込み、お客様ご相談センターの設立
→お客様第一主義(浮利にはしり軽進すべからず)
- グリーン調達と環境品質監査の実施、CSR調達の推進
→取引先とのパートナーシップ(三方よし)
- 女性登用への積極的取り組み、多様な勤務形態への取り組み、中国における技術・人材育成、→働きやすい職場づくり・従業員価値(人財)
- グリーンプロダクツ基準の強化、クリーンファクトリー認定制度の推進、省エネへの取り組み、リサイクルマネジメント
→環境保護・環境経営(三方よし)
- 松下政経塾、松下教育研究財団、パナソニックスカラシップ
→人材・指導者育成(人財)
- 野球・バレーボール・バスケットボールチーム
→スポーツ振興(陰徳あれば陽報あり)
- 芸術文化体験ワークショップ・チャリティコンサート開催
→芸術文化支援(陰徳あれば陽報あり)

VII. 参考① -現在の関西企業の取り組み- (6/6)

サントリー株式会社の取り組み



- カンパニー制による自立した事業運営、社内・社外監査役による監査体制、専任部署・委員会の設置
→コーポレート・ガバナンス(御法を守り我が身を敬むべし)
- 企業倫理綱領の制定、内部通報制度、全社へ継続的な情報発信
→コンプライアンス(御法を守り我が身を敬むべし)
- グループ品質方針の設定、専門委員会の設置、社内に分析機関の設置、適切な情報開示の推進
→品質保証への取り組み(浮利にはしり軽進すべからず)
- お客様対応の専門部署の設置、お客様の声を全社で継続的に共有・活用、積極的な情報発信、商品開発と研究、適正飲酒の啓発
→お客様第一主義(浮利にはしり軽進すべからず)
- 明確な基準による取引先との公正な取引、取引先との安全推進大会の開催、取引先との緊密かつタイムリーな情報・意見交換
→取引先への責任と行動(三方よし)
- 「やってみなはれ」風土の実現、障害者雇用の促進、考課と連動した賃金制度、キャリア開発の支援、仕事と育児の両立支援、風通しのよい職場風土の醸成
→働きやすい職場環境づくり・従業員への責任と行動(人財)
- 特別養護老人ホーム・保育園の運営、学校法人の運営サポート
→社会貢献(陰徳あれば陽報あり)
- サントリーホール、サントリー美術館、サントリーミュージアム、サントリー音楽財団、サントリー文化財団、サントリー生物有機科学研究所
→豊かな文化生活への貢献(陰徳あれば陽報あり)
- ラグビーチーム・バレーボールチームを組織しスポーツ振興を図るとともに、スポーツを通して次世代育成支援
→「夢」と「感動」を伝える社会貢献活動(陰徳あれば陽報あり)
- エコプロダクツの開発、エコファクトリーの推進、容器の循環利用、森林保全活動、こどもたちへの環境教育
→自然との共生・環境保護(三方よし)

Ⅶ. 参考② -注釈- (1/3)

※1:石田 梅岩(いしだ ばいがん) [1685-1744]

亀岡市の百姓の次男として生まれる。11歳で京都の呉服屋に丁稚奉公。奉公先の倒産により、一旦故郷へ戻る。23歳の時に再び奉公に出る。小栗了雲の教えを受け、思想家の道を歩み始める。「士農工商」の封建社会にあつて、商人が正等な利益をあげることは、武士の俸禄と同じであると説いた。儉約や正直、顧客満足、企業倫理について言及しており「石門心学」と呼ばれている。近江商人の「三方よし」とともに、「日本のCSRの原点」として、再評価されている。

※2:住友 政友(すみとも まさとも)[1585-1652]

住友家の家祖。武家の次男として生まれる。12歳の時、母と京都にのぼり、出家。徳川幕府の宗教弾圧により流刑。流刑を解かれて京都に戻り、書物と薬を扱う「富士屋」を開く。生粋の商人ではなかったが、宗教家の目で事業の精神を説いた。

※3:下村 彦右衛門正啓(しもむら ひこえもんしょうけい)[1688-1748]

摂津の生まれ。家業の古着屋を商い、地方行商で販売ルートの開拓を積極的に行う。東山の大文字が燃えるのを見て繁栄の象徴と感じ、京都伏見に「大文字屋」という呉服屋を構える。商標は「○」に「大」の文字が大きく入ったデザイン。○が示すのは天下。大は人と一を組み合わせた字。「天下一の商人になる」という意気込みを表している。後に大丸に改称。

※4:初代 飯田 新七(いいた しんしち)[1803-1874]

現・高島屋の創始者。越前敦賀の出身で、最初に京都の呉服屋に丁稚奉公。奉公が認められ高島屋飯田儀兵衛の長女・秀の婿となり、古着と木綿を扱う本家と同じ屋号「たかしまや」を開く。

※5:広瀬 宰平(ひろせ さいへい)[1828-1914]

滋賀県の医者の子として生まれる。11歳のとき住友に勤務する。38歳で別子銅山の支配人となる。積極的な西洋技術の導入をおこない、別子銅山の近代化を行った。住友経営の磐石な基礎をつくり、初代総理事となる。

(出典)

- ・「大阪ブランド資源報告書」大阪ブランドコミッティ
- ・「商家の家訓 商いの知恵と掟」山本真功
- ・「商いの原点 江戸商家の家訓に学ぶ」荒田弘司
- ・(財)滋賀県産業支援プラザ「三方よし」HP <<http://www.shigaplaza.or.jp/sanpou/index.html>>
- ・住友グループ広報委員会HP <<http://www.sumitomo.gr.jp/committee/index.html>>

Ⅶ. 参考② -注釈- (2/3)

※6:西川 甚五郎(にしかわ じんごろう)[1582-1675]

八幡(はちまん)商人。西川家二代目。「ふとんの西川」で知られる老舗の西川産業を作り上げた筆頭に上げられる。太陽の光に照らされる新緑からヒントを得て、生地を萌黄色に染め、縁を紅布に染めた蚊帳を開発、新商品が大ヒット。西川家の繁栄の礎を築いた。1807年の「勘定目録長」の末尾に記載された「定(さだめ)の事」に名高い家訓がある。

※7:中村 治兵衛(なかむら じへえ)[1685-1757]

五個荘(ごかしょう)商人。近隣の藩から麻の糸を仕入れ、農閑期に村人に配り、麻布を織らせた。この麻布を天秤棒につけて信濃へと行商に出掛けた。のちに、近隣の藩だけでなく、行商先の帰路途中で、麻の糸を仕入れて持ち帰るようになり、行きは生產品、帰りは材料を持ち帰る鋸商い(のこぎりあきない)を構築した。70歳の時に書いた「書置(かきおき)」の中に、名高い家訓の一説がある。

※8:八尾 喜兵衛(やお きへい)[1711-?]

現在の「株式会社矢尾本店」の蔵元の祖。近江日野に農家の次男として生まれたが、武蔵国秩父の活況にあこがれ、商人を志す。25年の奉公が認められ、屋号「升屋利兵衛(ますやりへい)」を開業。奉公人から立身出世した人であった。

※9:中井 源左衛門(なかい げんざえもん)[1716-1805]

椀問屋の長男として生まれる。幼くして父と死別し、19歳で行商に出る。資金は僅かながら、近江商人特有の粘りで、薄利多売商法を取り入れ商才を発揮。取引先は関東一円・甲斐・信濃にまで広がった。商人の生き抜く道を「金持商人一枚起請文(かねもちしょうにんいちまいきしょうもん)」に書き遺した。

※10:小林 吟右衛門(こばやし ぎんえもん)[1777-1854]

現・東近江市の小田刈村(こたかりむら)生まれ。湖東(ことう)商人。紅・呉服・染物の行商を行なった。江戸・京都どちらの店も繁盛した。彦根藩の両替御用達商人となる。丁吟(ちょうぎん)と称された小林吟右衛門の商売は、今も東京日本橋でチョーギン株式会社に引き継がれている。押込め隠居を正当化する拠り所となった「示合之篠目(しあわせのじょうもく)」を遺した。

※11:外村 与左衛門(とのむら よざえもん)

老舗の繊維会社として、その名前も残っている「外与(とのよ)株式会社」の祖。五個荘商人。外村家十代目。五代目の時に農業だけでは一家の繁栄は難しいと考え、麻布を仕入れ、大坂や堺・姫路など広い地域を行商した。十代目が今に伝わる家訓「心得書」(1856年)を制定した。

(出典)

- ・「商家の家訓 商いの知恵と掟」山本眞功
- ・「商いの原点 江戸商家の家訓に学ぶ」荒田弘司
- ・(財)滋賀県産業支援プラザ「三方よし」HP <<http://www.shigaplaza.or.jp/sanpou/index.html>>

Ⅶ. 参考② -注釈- (3/3)

※12:伊藤 忠兵衛(いとう ちゅうべえ)[1842-1903]

滋賀県豊郷町(とよさとちょう)生まれ。15歳で麻布の持ち下り商いを始め、九州を目指した。鎖国が解かれて、長崎で海外貿易が始まったばかりであった。ここでの繁栄ぶりを見聞し貿易に魅せられる。のちの総合商社・伊藤忠商事をつくるきっかけとなる。

※13:久保田 権四郎(くぼた ごんしろう)[1870-1959]

クボタの創業者。広島県生まれ。15歳で大阪へ出て鋳物屋に丁稚奉公。1890年鋳物メーカーとして創業。近代水道事業が急がれた時代、1893年水道用鋳鉄管(合わせ目の無い大型の水道管)の製造を開始。のちに大量生産に成功し、大阪や東京の水道管に使用され会社発展の基礎となった。

※14:小林 一三(こばやし いちぞう)[1873-1957]

山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業後、三井銀行(現・三井住友銀行)勤務を経て、証券会社に転職を図ったが、恐慌にみまわれ失業。その後、箕面有馬電気鉄道株式会社(現・阪急電鉄宝塚・箕面線)にあたる路線を開業させた。宝塚に大浴場・宝塚歌劇団・阪急百貨店などを創設、東宝を育成し、阪急東宝グループへと大成させた。

※15:鳥井 信治郎(とりい しんじろう)[1879-1962]

大阪の両替商の次男に生まれる。13歳で道修町の薬種問屋に丁稚奉公。奉公先の小西儀助商店にてウイスキー醸造業のパイオニアとなる素地を作った。20歳で、ぶどう酒や缶詰を扱う「鳥井商店」(現サントリー)を開く。日本人の口に合うポートワインや、国内初のウイスキーを発売。チャレンジ精神にとんだ新商品と斬新・意表をつく広告で寿屋(現サントリー)の名を一躍有名にした。

※16:松下 幸之助(まつした こうのすけ)[1894-1989]

松下電器を一代で築き上げる。和歌山県の農家の三男(8人兄弟の三男、末っ子)として生まれる。9歳で丁稚奉公。15歳で現・関西電力(当時大阪電灯)に入社、約6年間勤務。23歳で松下電気器具製作所を創業。1932年に事業経営の真の使命を発表。1935年、株式会社に改組し、松下電器産業(株)を設立、事業部制(1933年導入)を発展させた分社制を採用。社業はもとより、PHP研究所の創設、私財を投じた松下政経塾の設立など、社会貢献活動も他に類をみない。

(出典)

- ・「私の行き方」 小林一三
- ・「松下幸之助の見方・考え方」 PHP研究所
- ・伊藤忠HP <<http://www.itochu.co.jp/main/>>
- ・クボタHP <<http://www.kubota.co.jp/>>
- ・サントリーHP <<http://www.suntory.co.jp/>>

Ⅶ. 参考③ -参考図書・HP-

(1)参考図書

「CSRの最前線」	古賀純一郎(NTT出版)
「CSRで経営力を高める」	水尾順一(東洋経済新報社)
「CSRマネジメント」	水尾順一・田中宏司(社会経済生産性本部)
「CSR優良企業への挑戦」	藤井良広・原田勝広(日本経済新聞社)
「CSR働きがい束ねる経営」	日経CSRプロジェクト(日本経済新聞社)
「CSR企業価値をどう高めるか」	高巖・日経CSRプロジェクト(日本経済新聞社)
「ヨーロッパのCSRと日本のCSR」	藤井敏彦(日科技連出版社)
「ビジネスの倫理学」	梅津光弘(丸善)
「会社に社会的責任はあるか」	奥村宏(岩波書店)
「会社はだれのものか」	岩井克人(平凡社)
「会社はこれからどうなるのか」	岩井克人(平凡社)
「資本主義に徳はあるのか」	アンドレ・コント・スポンヴィル(紀伊国屋書店)
「なぜ企業不祥事は起こるのか」	ローレンス・E・ミッチェル(麗澤大学出版会)
「持続可能な発展の経済学」	ハーマン・E・デイリー(みすず書房)
「大阪ブランド資源報告書」	大阪ブランドコミッティ
「懐徳堂」	テツオ・ナジタ(岩波書店)
「日本町人道の研究～商人心の原点を探る」	宮本又次(PHP研究所)
「大阪まち物語」	なにわ物語研究会編(創元社)
「商家の家訓 商いの知恵と掟」	山本真功(青春出版社)
「商いの原点 江戸商家の家訓に学ぶ」	荒田弘司(すばる舎)
「江戸に学ぶ企業倫理 日本におけるCSRの源流」	弦間 明+小林俊治(社会経済生産性本部)
「企業倫理とは何か 石田梅岩に学ぶCSRの精神」	平田雅彦(PHP研究所)
「日本的経営の源流を尋ねて」	堀出一郎(麗澤大学出版会)
「松下幸之助の見方・考え方」	(PHP研究所)
「私の行き方」	小林一三(PHP研究所)

(2)参考HP

伊藤忠商事(株)	http://www.itochu.co.jp/main/top.html
大阪ガス(株) ※CSR	http://www.osakagas.co.jp/kankyo/report/index.html
がんこフードサービス(株)	http://www.gankofood.co.jp/syokai.html
(株)クボタ	http://www.kubota.co.jp/
サントリー(株) ※CSR	http://www.suntory.co.jp/company/csr/
(財)滋賀県産業支援プラザ「三方よし」	http://www.shigaplaza.or.jp/sanpou/index.html
住友グループ広報委員会	http://www.sumitomo.gr.jp/committee/index.html
日本生命保険(相)	http://www.nissay.co.jp/kaisya/index.html
松下電器産業(株) ※CSR	http://panasonic.co.jp/company/cc_0010.html

VIII. 活動状況

平成18年

○7月10日:正副委員長会議

・「平成18年度の活動方針について」

○8月28日:正副委員長会議

・「日本生命の社会公共活動」

講師:日本生命保険(相) 企画総務部社会公共課長 三神 拓也 氏

・「サントリーにおけるCSRについて」

講師:サントリー(株) CSR推進部長 内貴 研二 氏

○9月19日:講演会・正副委員長会議

・「米国の企業経営の光と影」

講師:(株)デフタパートナーズ 取締役・グループ会長 原 丈人 氏

○11月7日:正副委員長会議

・「松下幸之助に学ぶ企業経営」

講師:元松下電器産業(株)人事部次長/(学)雲雀丘学園 中学・高等学校 校長
中尾 直史 氏

○12月11日:講演会・正副委員長会議

・「消費者の立場から見た企業への期待」

講師:雪印乳業(株) 取締役 日和佐 信子 氏

平成19年

○1月13日:スタッフ会

・「提言のとりまとめ方向について」

○2月26日:正副委員長会議

・「提言のとりまとめ方向について」

○3月30日:正副委員長会議

・「提言(案)についての討議」

IX. 名簿

委員長	鳥井 信吾	サントリー	副社長
副委員長	滝 哲郎	日本生命保険	専務
	佐伯 剛	日本公認会計士協会近畿会	会長
	酒井 孝志	大阪ガス	執行役員
	豊田 峻	内藤証券	常務執行役員
	井垣 貴子	アートアパリエイツジャパン	代表取締役
	鴻池 忠彦	鴻池運輸	社長
	熊谷 京子	クマリフト	代表取締役
	小倉 宏之	小鯛雀鮨 鮨萬	代表取締役
	野村 卓也	スーパーステーション	社長
	小嶋 達典	がんこフードサービス	取締役
	田中 拓也	シスコシステムズ	西日本公共営業本部長
	森田 義一	帝人	専務執行役員
	内田 弘通	大林組	常務執行役員
スタッフ	金嶋 大造	サントリー	大阪秘書部課長
	増地 綾子	サントリー	大阪秘書部
	青木 一幸	日本生命保険	本店広報室長
	関 通安	大阪ガス	秘書部経営調査室副課長
	田中 芳美	内藤証券	内部監査部長
	田中 郁雄	クマリフト	経営管理部係長
	田崎友紀子	スーパーステーション	副社長
	武居 靖道	帝人クリエイティブスタッフ	人財部長
代表幹事スタッフ	大野 敬	西日本電信電話	総務部企画担当課長
	角田 和弥	西日本電信電話	総務部企画担当主査
	野田 通夫	がんこフードサービス	企画部長
	廣瀬 茂夫	がんこフードサービス	企画部部長
事務局	萩尾 千里	関西経済同友会	常任幹事
	斉藤 行巨	関西経済同友会	事務局長
	松尾 康弘	関西経済同友会	事務局次長兼企画調査部長
	金子 秀一	関西経済同友会	企画調査部副部長